

〔書評〕メディア史研究の「フロンティア」

— 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』——

花田史彦

一 はじめに

本稿では、竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』（創元社、二〇一四年。以下『日本の論壇雑誌』）の書評を行なう。

近年、日本の雑誌研究の成果はいくつも提出されている。だがそれらはいくまでも個別の雑誌研究であり、⁽¹⁾そうした複数の雑誌群（およびそこに寄稿した人々）によって構成された「論壇」に関する研究は、本書で佐藤卓己が指摘するように乏しい（二二二頁）⁽²⁾。「論壇」あるいはその構成要素である「論壇雑誌」の研究という、ほぼ未開拓の領域に挑んだのが、本書である。

本書は三部一章と関連年表からなる。各タイトルは以下のとおりである。

竹内洋「序論」

第一部 論壇のフォーマット

第一章 竹内洋『中央公論』——誌運の法則——

第二章 井上義和『文藝春秋』——卒業しない

国民雑誌

第三章 佐藤卓己『世界』——戦後平和主義のメ

ートル原器

第二部 論壇のアキレス腱

第四章 稲垣恭子『婦人公論』——お茶の間論壇

の誕生」

第五章 佐藤八寿子『暮しの手帖』——山の手知

識人の覇権」

第六章 長崎励朗『朝日ジャーナル』——桜色の

若者論壇誌」

第七章 松永智子『ニューズウィーク日本版』——

論壇は国際化の夢を見る」

第三部 論壇のフロンティア

第八章 井上義和『諸君！』——革新幻想への解

毒剤」

第九章 大澤聡『流動』——新左翼系総合屋雑誌

と対抗的言論空間」

第十章 赤上裕幸『放送朝日』——戦後京都学派

とテレビ論壇」

第十一章 富田英典「ネット論壇」——論壇のデ

ジタル化とインターネット」

白戸健一郎『日本の論壇雑誌』関連年表」

本書は「論壇雑誌」と呼ばれるメディアについて、

各執筆者が一誌ずつ取り上げて研究したものである。

本稿では、主にメディア史研究者の手による第二章(佐

藤)、第六章(長崎)、第七章(松永)、第九章(大澤)、

第十章(赤上)、関連年表(白戸)を検討する。なお、

その他の(教育)社会学研究者によつて書かれた各章

については佐々木基裕氏による書評を参照されたい。

そもそも「論壇雑誌」とは何か。竹内洋は「序論」

において次のように定義する。「論壇雑誌というのは、

政治・経済から文藝・哲学・科学まで部門を限定せず

掲載し、一つの体系をあたえる高級評論誌、いわゆる

『総合雑誌』のこと」だという(一頁)。「総合雑誌」

という言葉は、一九三〇年代から広く一般に普及しは

じめた。その前駆的形態はずでに世紀転換期には生ま

れており、それらは一九一〇年代の第一次高等教育マ

ス化に伴い、隆盛をむかえる。高等教育のマス化は、

「限定文化界Ⅱアカデミズム」と「マス文化界Ⅱ大衆

ジャーナリズム」とを架橋する「中間文化界Ⅱ高級ジ

「ヤナーリズム」の存在を必要とし、それを「論壇雑誌」が担ったのだと竹内は述べる。

さらに一九四五年、敗戦のショックは、「限定文化界Ⅱアカデミズム」が「学問のための学問」「芸術のための芸術」にとどまることを許さない。「言論にはアクチュアルな、社会的・政治的レリバンズが要請され」、いよいよ「論壇雑誌」は活況を呈し、知識人も「講壇」的たるよりも「論壇Ⅱ公共」的たることを求められたのである（五頁）。

「論壇」は「中間文化界」であり、「論壇雑誌」はそれを担うメディアだとする竹内の見解はあくまでも大まかな理念型を提供するにとどまっているが、そのことが却って、本書が多様な雑誌を対象とすることを可能にした。本書を読み進めるうち、この国の「限定文化界Ⅱアカデミズム」と「マス文化界Ⅱ大衆ジャーナリズム」とを架橋してきた存在が、思いのほか色どりを豊かであったことに我々は気づくだろう。それはすなわち、これまで抱いてきた「論壇」「論壇雑誌」のイメ

ージが問い直される契機を得ることを意味する。「論壇」についての分析が、いつしか我々のなかの「論壇」を解体してゆく。この逆説的な体験もまた、本書の醍醐味だろう。とはいえ、理念型としての「論壇」「論壇雑誌」を前提とした本書はある種の限界も孕んでいる。それについては本稿の結論部分にゆずることにして、まずは各章の内容紹介を行なう。

二 佐藤卓己『世界』——戦後平和主義のメー トル原器

本章は、執筆者・佐藤が岩波書店の栄光時代（一九三〇～六〇年代）を貫戦史の手法で描いた『物語 岩波書店百年史2——「教育」の時代』（岩波書店、二〇一三年。以下『百年史2』）の姉妹篇ということになる。『百年史2』ではあまり触れられることがなかった『世界』とそれが担った平和運動が本章の素材である。

本書の枠組みにおいて、『世界』は『中央公論』『文

『藝春秋』と並び「論壇のフォーマット」を構成する雑誌とされているが、同誌だけが第二次世界大戦の敗戦を契機として生まれた「戦後雑誌」である。そのような雑誌は当時珍しいものではなかったが、そのなかで延命に成功したのは『世界』のみだという。だから『世界』の盛衰自体が「戦後」という時代の、とりわけ同誌が重要な「戦後の価値」として今も守りつづけている平和主義の盛衰を計測するひとつの基準（メートル原器）となる（七七―七八頁）。

では、いかにして『世界』は「戦後平和主義のメートル原器」となったか。以下でその過程を追い、本章について検討する。

『世界』は一九四五年二月、戦争を止めることができなかつたことを悔やむ岩波書店創業者・岩波茂雄とその下に集つた知識人たち―「悔恨共同体」―の手で創刊された。当初、『世界』の中核は、安倍能成や津田左右吉ら大正教養主義世代のオールドリベラリストによって構成された同心会であった。そこに大内兵衛

ら講座派（共産党グループ）、丸山眞男ら後の「戦後民主主義者」が加わり、寄り合い所帯となつた。それを束ねたのが編集長・吉野源三郎である。世代も思想も異にする三者を束ねるために吉野が用いたテーゼこそ「平和国家」であり、これが『世界』執筆者のまじまりを担保したと同時に、同誌の限界をつくりもした。『世界』の平和運動への傾斜は、オールドリベラリストたちの違和感・離脱、執筆者の世代交代（戦後民主主義者）が『世界』の中核へ）を招くことになる。

では、『世界』の読者はどのような人々だったのか。また、「論壇」における『世界』の意味とは何か。

『世界』の読者層は、会社員、教員、官公吏などホワイト・カラーと呼ばれる人々が中心であった。岩波茂雄は『世界』を講談社の『キング』のように広く人々に読まれる雑誌にしたかつたようだが、その志は叶わなかつたことになる。また執筆者に関して言えば、その多くが一九五〇年代における「論壇時評」でたびたび言及され、あるいは「論壇時評」の担当者であると

というようなマッチポンプ的状况であった。『世界』とは、読み手にとっては「高学歴ホワイト・カラーの『精神安定剤』であり、書き手にとっては「論壇へのプラチナ・チケツト」だった(九五頁)。そしてその「プラチナ・チケツト」を手にするためには、『世界』が掲げる平和主義への賛同が必須であった。

『世界』の平和主義は、具体的には、吉野源三郎による「八・一五体験の組織化」として実現した。佐藤が指摘するように、「八月一五日」終戦記念日という「常識」は決して一九四五年八月から自明だったのではない。その「常識」の定着は『世界』に拠るところが大きかったという。吉野は、戦争や帝国の「終わり」を意味する「八・一四(ポツダム宣言受諾決定)」や「九・二(ミズーリ号での無条件降伏)」ではなく、玉音放送が行なわれた「八・一五」を平和の「新たな未知のコース」へのスタートとして位置づけ、「八・一五体験」の回想を公募するなどして、何度も『世界』誌上でその特集を組んだ(二〇〇頁)。その活動は実を結び、た

しかにある時期『世界』は平和主義の本流たりえたのだった。だが佐藤は、同誌の在り方が同時に、「八・一五」体験を優等生的なものへと標準化したのではないかと問いかけている。

佐藤がこれまで世に問うてきた一連の著作に通底する問題意識をあえて一言で述べるなら、それは「戦後」批判ということになるだろう。「戦前」や「戦時」と切り離された形で一九四五年以降の時期を「戦後」として語ることの虚構性を佐藤は一貫して批判的に検討してきたといつてよい。本章もその文脈において読むことができる。

もちろん、ある概念を虚構だと述べただけでは批判にならない。それがいかなる問題を孕んでいるのか、ということを示す必要がある。そうすることで、はじめて「戦後」批判は成立する。だから佐藤は、たとえば「戦後」のリベラルな言論人たちが鈴木庫三という軍人をスケープゴートにして、弾圧と抵抗の「戦時」言論史と、そこから切り離されたものとしての「戦後」

言論史とを紡いでゆく過程をたどり、また右派と左派の双方が政治的意義の稀薄な「八月十五日」という日を「終戦記念日」＝「戦後」の起点として立ち上げてゆくメカニズムを明らかにした。その作業は、暗い「戦前」「戦時」と明るい「戦後」との断絶を自明視することとが、「戦後」言論人の戦争責任と「戦時」弾圧者の言い分を、そして「戦前」「戦時」「戦後」をとおしてメディアが備えてきたはずの権力性を覆い隠してしまうことを示唆した。⁶⁾「戦後」は「戦前」「戦時」を前提としたものであり、したがっていつでも「戦前」「戦時」へと転換しうるのである。

さて、今回佐藤は代表的な「戦後雑誌」である『世界』を素材に、平和主義というひとつの重要な「戦後の価値」がどのように維持されてきたかを批判的に分析した。佐藤によれば、『世界』の平和主義は、かの雑誌が「論壇へのプラチナ・チケット」であり「高学歴ホワイト・カラーの『精神安定剤』」だったからこそ保たれた。つまり、平和主義への賛同が「論壇」とのつ

ながりの担保に、あるいは戦争を止められなかったことへの罪悪感の慰撫に結びついたからこそ、人々は『世界』に書き、『世界』を読んだ。そしてこの事実は、そのような「メリット」なしに、果たしてどれほどの人が平和主義を積極的に擁護しただろうか、という問いを喚起する。それは「平和な時代」としての「戦後」の強度を、いまいちど点検してみる機会が設けられたことを意味している。

たしかに、「プラチナ・チケット」のための平和主義「精神安定剤」としての平和主義、標準化された優等生的な平和主義は、問題を孕むだろう。だがもちろん、「そんな」平和主義でも、「ないよりマシ」だったのかもしれない。ここから先は、評者も含む本章の読者が考えてゆくべきことである。

三 長崎励朗『朝日ジャーナル』——桜色の若者論壇誌

本章で取り上げられるのは、一九六〇～七〇年代にかけて全共闘世代の学生に熱烈な支持を受けた『朝日ジャーナル』（以下『朝ジャ』）である。

『朝ジャ』といえば、本章執筆者・長崎の言葉を借りれば、「朝日『新聞・引用者』が、そして若者たちが最も『アカ』かった時代の象徴」とされてきた雑誌である。だが御厨貴らの研究は、そのような見方を批判している。すなわち、雑誌の誌面に登場する論者は左翼系だったが、編集部自体は中立であり、決して『朝ジャ』を「アカ」と言うことはできない、と。

長崎は、右に挙げた先行研究に対し、本章で再批判を試みる。編集部が仮に「中立」であったとしても、それは読者にとって何の意味もない。読者には誌面とそこに出てくる論者がすべてである。そこから読者は『朝ジャ』という雑誌の性質について判断を下す。だ

から問題は、いかなる論者が誌面に出てきているのかということなのである。

そのことを論じるために長崎が採用した手法がネットワーク分析である。『朝ジャ』が執筆者を他の雑誌とどの程度共有していたのか。その関係を明らかにすることでこの雑誌の相対的な立ち位置を析出することができるというわけだ。雑誌研究でしばしば取り上げられる当事者の声や誌面の内容といった質的要素をあえて排除し、執筆者の数とその「つながり」のみを問題にしたのが本章の特徴である。「中立」「アカ」などの言葉はそもそも定義することが難しい。また、雑誌をつくる側の自己認識と、読者が雑誌を見る目も往々にして食い違うものだ。ならば、『朝ジャ』編集部の自己認識や誌面の内容を検討することはひとまず措き、雑誌間の関係把握を優先すべきだというのが長崎の意図だろう。では、分析結果を以下に見ていこう。

長崎は『朝ジャ』『中央公論』『文藝春秋』『自由』『展望』『思想』『世界』『心』『潮』『現代の眼』『現代の理

論』『思想の科学』『諸君!』の二三誌を用いて、それぞれの雑誌で重複している論者の数を割り出す。さらにその数値を標準化し、雑誌間のつながりの強さを「1」（平均値以上）「0」（平均値未満）であらわした。

本章で分析対象とされた時期は、また学生運動が盛んな一九六九年と、ニューアカブームの波に乗り若者に支持された筑紫哲也編集長時代（筑紫軽チャー路線）の一九八四年である。まず一九六九年、『朝ジャ』は『世界』『思想』『思想の科学』『展望』といった左派系の雑誌と強いつながりを示しながらも、『中央公論』『潮』とも執筆者を一定数共有している。この時期を長崎は『朝ジャ』が「左派論壇の一人としての性格を持ちつつも、様々な著者が相互乗り入れすることのできる媒体として存在していた」とする（一七五頁）。いわば『朝ジャ』の立ち位置は、「アカ」ではなく「櫻色」だったというわけだ。だが一九八四年になると、そのような「論壇」の構図は一変することになる。一九六九年のときのような左右の棲み分けはなくなり、

派閥が重なり合った状態となる。そして、『朝ジャ』は唯一すべての派閥（クリーク）に属している。このとき、すでに『朝ジャ』は「櫻色」ではない。「白色」あるいは「無色透明」の雑誌となっていた。

以上の分析結果を、長崎は民主主義の問題と接続する。「討議型民主主義」と「参加型民主主義」という民主主義の二つの在り方はトレードオフの関係だとされる。つまり、人々の政治参加が増えれば増えるほど（参加型民主主義）、自分とは異なる意見をもつ人間と討議をする機会は失われるというわけだ。

だが、この二つの民主主義は本当に対立するのだろうか。そもそも参加がないところに討議など存在するのだろうかと長崎は問う。雑誌購読者が多かった一九六九年を「論壇」の「参加型民主主義」時代だと考えるならば、購読者数が減少した一九八四年になれば「討議型民主主義」が実現するはずだが、その時期には『朝ジャ』も「白く」なり、むしろ一九六九年よりも「論壇」は退潮していた。「参加」と「討議」とは決してト

リードオフの関係ではなく、両立しうる。一九六九年という「参加型民主主義」の時代に「櫻色」の雑誌として保革の橋渡しを担った『朝シヤ』から学ぶことは多い。長崎はメディアが民主主義を支える可能性を示唆して本章を閉じている。

ネットワーク分析という手法を用い、客観的な数値から導きだせる雑誌同士の関係（それをこそ「論壇」と呼ぶべきなのかもしれない）の分析を行なった本章は、新しい『朝シヤ』像を、ひいては「論壇」像を提示した。だが疑問も残る。たとえば、分析のために選ばれた一三誌（一九八四年は二〇誌）の選定基準は何だったのか。本書だけを見渡しても、この一三誌に取り上げられていないものが散見される。たとえば第四章、第五章で分析されている女性向け「論壇雑誌」をネットワーク分析の俎上にのせたとき、どのような図を描けるのだろうか。また、長崎は今回二つの数字で雑誌間の「つながり」の「有無」のみを示しており、その「強度」の差を捨象してしまっている。

ともあれ、課題の多さは、本章でなされた試みの可能性を示してもいる。本章が収録されている第二部のタイトルは「論壇のアキレス腱」だが、佐藤卓己によれば、この「アキレス腱」とは弱点や急所の謂ではなく、「人体では最大最強の腱で、走り、跳ぶためには不可欠なもの」を意味する⁸⁾。『朝シヤ』が「論壇のアキレス腱」であるならば、それを従来の雑誌研究には用いられてこなかった手法によって分析した本章は、メディア史研究の「アキレス腱」なのかもしれない。

四 松永智子『ニューズウィーク日本版』——論壇は国際化の夢を見る」

前二章からは時代を下った一九八九年の時点から本章は書き起こされる。当時、日本で盛んに唱えられていた「論壇の国際化」という試みがいかなる形で実現したのか。そのひとつの事例として『ニューズウィーク日本版』（以下『ニューズウィーク』）を検討したの

が本章である。

一九八〇年代末から九〇年代初頭にかけて、国際情勢は大いに動揺した。天安門事件（一九八九年）、ベルリンの壁崩壊（一九八九年）、ソ連解体（一九九二年）、湾岸戦争（一九九一年）と、大事件が目白押しである。

そのような世界的な転換期であったにもかかわらず、すでに日本における従来の「論壇雑誌」は退潮気味だった。めまぐるしく変化する国際情勢のなか、「論壇」に求められたのはスピード化と国際化である。『ニューズウィーク』は、そのような文脈において登場した。本章執筆者・松永の言葉を借りて言えば、『ニューズウィーク』とは「ポスト論壇誌時代」の「論壇雑誌」であった（一八七頁）。

『ニューズウィーク』の企画は、一九八四年にサントリー会長・佐治敬三がアメリカのニュース誌『Newsweek』を日本語で読みたいと同誌親会社の会長に対して語ったことに端を発する。当時の日本経済の国際的競争力も手伝い、日本版発行の運びとなった。

「日本語版」ではなく「日本版」であることもポイントである。『ニューズウィーク』は単なる『Newsweek』の日本語訳ではなく、特集は日本の読者の関心を考慮したもの選ばれていた。

一九八六年、『ニューズウィーク』が創刊された。松永によれば、この雑誌の魅力は「知的・硬派」「ビジュアル性」「超日本的視点」だった。

「知的・硬派」について。これは「冗舌や余計な形容詞、感嘆詞、思わせぶりの疑問詞に禁欲的な「中略」引用者」文体や、報道分析の鋭さ（一九四頁）を意味する。だが、そのような雑誌は『ニューズウィーク』以外にも存在する。ここで二つ目の「ビジュアル性」が重要になってくる。『ニューズウィーク』は全頁カラー印刷で、写真を多用した。これが他の「知的・硬派」な雑誌（たとえば『アステイオン』）とは一線を画した。そして最も重要なのは三つ目の「超日本的視点」だ。『ニューズウィーク』は、海外（アメリカ）から見た日本、という「外部」の視点をその特徴としていた。

「本当のアメリカ人の声」を「日本メディアの手垢の付いていない」状態で届けたことが『ニューズウィーク』が読者に支持された最大の理由であった。「アメリカから見た日本」を知ることへの欲求は湾岸戦争によってひとつの臨界へと到る。

戦後日本の安全保障のパラダイム転換を促した湾岸戦争は、『ニューズウィーク』誌上でも中心的な話題であった。同誌は米国参戦の妥当性を論じ、また日本の自衛隊派遣拒否を批判した。そのような記事が踊る誌面は、読者に影響を与える。「アメリカから見た日本」というナショナルなレベルで展開される誌面は、読者に「われわれ」日本人、「彼ら」アメリカ人」という認識を内面化させた(二〇三頁)。「彼ら」が提出してくる日本評は、必ずしも「長期的視野をもつ論(opinion)」や「検証された評価(reputation)」とは限らない。まず読者がそれらを求めている。重要なのは、「彼ら」がどのような「イメージ」を日本に対して抱いているかであり、いま現在における日本の「評

判(popularity)」であった。当然、「評判」は移ろう。だが、その移ろいやすいものを提供したからこそ、『ニューズウィーク』は従来の「論壇」に飽き足らなかつた読者を獲得した。

『ニューズウィーク』の成功は、「国際」を掲げる雑誌の創刊も促した。それらは必ずしも成功したとは言いがたいし、「論壇の国際化」の不十分さは当時も指摘されていた。結局「論壇の国際化」は、明治以降繰り返されてきた英語公用語論争にも似て、これからも語られてゆくだろうと松永は述べる(二〇六頁)。いわば見果てぬ夢である。

だが、最後に松永は『ニューズウィーク』が「国際版の記事を日本語に翻訳するのみならず、日本版の記事を英訳して国際版に提供する発信媒体でもある」点に着目し、グローバル化時代における同誌の「実験的メディア」としての可能性を示唆している(二〇七頁)。

ところで、そもそも松永が「長文の文明論や外交論が展開されるいわゆる論壇誌とは質的に異なっている」

『ニューズウィーク』分析をとおして企図したことは、以下のとおりである。

論壇誌と新聞文化面をフオーローしてさえいれば最新の思想動向が把握できる単純な構造が瓦解した現代、「論壇」研究では旧来ならば「論壇的」と見なされなかった媒体や書き手をも論壇に組み込んでいく必要性が説かれている。したがって、『ニューズウィーク』のメディアの特徴と受容形式を考察することは、「論壇」の語義を拡張し組み替える作業に貢献するものと考ええる。(一八八頁)

「論壇」の語義を拡張し組み替えること。竹内洋が「序論」において示した「論壇Ⅱ中間文化界」という定義は、アカデミズムと大衆ジャーナリズムとをつなぐものを意味する。竹内の念頭にあるのは、アカデミズム―高級ジャーナリズム―大衆ジャーナリズムという、いわば一国内における「タテの関係」である。一

方、松永が本章で展開した議論は、竹内のそれとはベクトルを異にする。松永が問題にしたのは、日本―アメリカという国境を越えた「ヨコの関係」である。松永は「論壇」が国境を越えた地政学に規定される状況を描いた。「論壇」を規定する要素として「空間」を持ち込んだのが本章だと言える。「論壇」を規定するのは、決して知識人同士の人間関係や読者の関心だけではない。地球の裏側で起こった事件が、ときに思わぬ影響を日本の「論壇」に及ぼし、新たな領域へと「論壇」を拡張してゆく。

もちろん、「論」ではなく「評判」を主に扱ってきた『ニューズウィーク』が「論壇雑誌」たりうるのか、疑問は残る。だが、「空間」とのせめぎ合いのなかで移ろいゆく動態的なものとして「論壇」を捉えようと試みた本章は、『ニューズウィーク』に劣らず「実験的」である。

五 大澤聡「流動」——新左翼系総会屋雑誌と対抗的言論空間

本章は「論壇のフロンティア」と名づけられた第三部に位置する。前節の松永論文から少し時代を遡った一九七〇〜八〇年代がその舞台である。扱われるのは『流動』という雑誌だ。

『流動』とは、いかなる雑誌であつたか。本章執筆者の大澤が紹介する同誌上の企画はユニークだ。たとえば「大学卒業論文」や無署名コラムの特集である。卒論特集には、のちの著名な作家、芸術家、学者、評論家も寄稿していた。

しかし、かつての寄稿経験者たちはこの雑誌を「とるに足らない媒体」と語る。だが本当にそうか。本章で大澤が試みているのは、『流動』を含む「新左翼系総会屋雑誌」の言論史上における意味づけである。「とるに足らない媒体」が、じつは「とるに足る」ものであつたことを大澤は示す。以下、本章の内容を検討する。

まず『流動』が属する「新左翼系総会屋雑誌」とは何か。「新左翼系」は体制批判的な誌面内容を、また「総会屋」は雑誌の資金源をそれぞれあらわしている。『流動』はオーナー・倉林公夫の総会屋活動をその資金源にしていた。多くの企業広告が誌面に掲載され、雑誌の経営主体は総会屋という「資本主義の暗部」である（二四八―二四九頁）。だが、誌面内容は、新左翼系のオピニオン総合誌に分類されるような体制批判的なものだった。この「ねじれ」を内包したメディアが「新左翼系総会屋雑誌」である。

一九七〇年代、既存総合誌『世界』『中央公論』『展望』などがアカデミズムへの接近の度合いを高める中、「新左翼系総会屋雑誌」は既存総合誌が扱わないタブーに切り込むことで左派メディアの一角を占める。そのような活動を可能にしたのは、オーナーの総会屋活動への対価として金を出し、誌面内容にはとくに関心をもたない―「金は出しても口は出さない」―スポンサー企業の存在であつた（二五〇頁）。

さて、『流動』の中身は常に一定だったわけではない。同誌は一九六九年に創刊され、八二年に休刊することになるが、その二三年間に傾向は変わった。「経済・外交もの」から「文化・思想もの」への移行である。前者の時期には政治家を招いた座談会が掲載されたり、企業を告発するルポ、政見分析などの記事が並んだ。それは、『流動』の想定読者がビジネスパーソンであったことによる。後者の時期になると、学生や思想読者を想定した特集が目立った。「新左翼」「大学」「学問」「出版」といったテーマだ。またブックガイド／ガイドブック化も進んだ。

「新左翼系総会屋雑誌」の隆盛は、六〇年安保闘争以降の『世界』『中央公論』など「論壇のフォーマット」の退潮を補完するものとして意味付けることができる。大澤によれば七〇年前後に「新左翼系総会屋雑誌」が出揃うことになるが、これはすなわち、特定メディアが全体性を代表しうる時代の終焉を意味した。これはまた、雑誌メディアが担うべきものが「論」から「情

報」へと移ったことも意味する（二六〇頁）。雑誌メディアは、その役割を「総合」から「分化」へと移した。佐藤卓己が『世界』の歴史を多様な意見をシンターゼに導く「総合」雑誌から、書き手と読者を平和運動へと動員する「総合」雑誌への変化として描いたことを考えると、『流動』がいかに「戦後」の「論壇」から遠いところにあるかが分かる。『流動』は「総合」どころか「総合」のメディアですらなかった。全体性やそれを俯瞰する統一的視点という虚構（＝「論壇」）が失われた、細分化の時代としての一九七〇年代を『流動』は象徴していた。

『流動』を含む「新左翼系総会屋雑誌」は一九八二年の改正商法施行によって、あつけなく壊滅し、「存在したいが忘却され」た（二五三頁）。では「新左翼系総会屋雑誌」が象徴する七〇年代とは言論史上においていかなる時代であったか。大澤は『流動』に集った田原総一郎、鎌田慧、桂秀実ら若い書き手たちに注目する。彼らは七〇年代に「新左翼系

総会屋雑誌」を「稼ぎ場」として食いつなぎ、それが壊滅したのは、さまざまなメディアに拡散していった。そして八〇年代の批評／情報の時代を担うことになるのだ。政治の時代（一九五〇年代、六〇年代）と批評／情報の時代（八〇年代）との「ミッシングリンク」（二六四頁）として大澤は七〇年代を位置づける。「新左翼系総会屋雑誌」は、たしかにその時代を下支えしていたのだ。

あるいは、こうも言えるかもしれない。たしかに『流動』の時代以降、『世界』や『中央公論』に代表される「論壇」は退潮した。ただし、それはあくまでも雑誌という「場」としての「論壇」である。『流動』で食いつないだ書き手がその後も活躍をつづけたように、「人脈」としての「論壇」はその後も残ったのではないだろうか。「場」から「人脈」への「論壇」移行期としても、七〇年代は位置づけることができるのではないか。いよいよ我々は「論壇」という言葉の多義性・流動性と向き合わざるを得なくなってきた。これは本書の

全体に関わる問題であるため、最後に論じる。

六 赤上裕幸『放送朝日』——戦後京都学派とテレビ論壇

本章の対象は、大阪・朝日放送のPR誌『放送朝日』である。同誌は、一九五四年に創刊された（当初のタイトルは『月刊朝日放送』。一九五五年から『放送朝日』に改称）。内容はテレビやラジオに関する記事にとどまらず、日本文化論なども掲載されるなど、多彩であった。単なるテレビ局のPR誌ではない、テレビやラジオなど電波メディアが普及していく社会のなかで「電波論壇」を形成し得たのが『放送朝日』という雑誌であった。

『放送朝日』の主要執筆メンバーは京都大学人文科学研究所のメンバーとも重なる。梅棹忠夫を中心に、今西錦司、桑原武夫、多田道太郎らが同誌に集った。彼らを本章執筆者・赤上は「新京都学派」ならぬ「戦

後京都学派」と呼ぶ。「戦後京都学派」（IIアカデミズム）とテレビやラジオといった電波メディアとの媒体（II「電波論壇」）になったのが『放送朝日』であった。その特徴を赤上は「フロンティア感覚」「ユーモア」「SF的発想」の三つだとする。

まず「フロンティア感覚」だが、『放送朝日』が創刊された一九五〇年代、電波メディアはまだ「若い」存在であった。当時、同誌の書き手も読み手も、電波メディアという未知の領域に、ひいてはそれによって豊かになってゆくはずの文化に期待を寄せたのだろう。そのような書き手と読み手との間に広がっていた期待感が、同誌の「フロンティア感覚」である。

次の「ユーモア」とは、放送の問題を単なる業界分析のようなアプローチではなく、日本文化の問題として大きな視野で捉える同誌の姿勢を指す。

そして重要なのが三つ目、「SF的発想」である。『放送朝日』誌上では、しばしば電波メディアや情報産業のゆくえが議論された。それは「未来」について思考

することへと論者たちを導いてゆくことになる。

『放送朝日』が喚起した「未来」への思考は、やがて「戦後京都学派」の情報産業社会論へと結実する。

そこで論じられたのが、一つは「情報産業社会」の到来にともなう教育機会の拡大であり、もう一つは来たるべき「情報産業社会」における知識人の役割である。

一つ目について。梅棹らは不特定多数の人々へ同時に情報を送ることができるテレビを「社会教育機関」と捉え、テレビが教育機会の拡大や「国民の知識、教養の平均化」に貢献する可能性を論じている。

二つ目について。「情報産業社会」の到来によって、知識人も実業界ほか社会との接点をもたざるを得なくなってきたと「戦後京都学派」の人々は意識した。たとえば小松左京が象徴的だが、小説を書き、メディア出演をし、大阪万博のプロジェクトに積極的に関与する、非常に精力的かつ多彩な活動を展開した。赤上は東浩紀の言葉を引用して小松のそのような在り方を「総合知識人」とする（二八一頁）。

『放送朝日』は、テレビというニューメディアと社会との関わりについて思考をめぐらす「総合知識人」たちが集う場になっていた。そこで培われたアイディアや人脈は、やがて日本未来学会（一九六八年）や放送大学（一九八一年）に結実する。赤上が検討しているのは日本未来学会だが、これは未来が「どうなる」のか、そして未来を「どうする」のかということについて考える知識人の集いであった。専門領域は多様である。「未来」という時間軸の導入が、さまざまな知の体系を結集させた。ここに赤上は新しい「論壇」の萌芽をみる（二八七頁）。だがその可能性は突然絶たれることになった。一九七五年、経済不況にともなう『放送朝日』の休刊である。こうして、「未来」を射程に入れた「電波論壇」の夢は「未発の可能性⁹⁾」となった。赤上はその著書『ポスト活字の考古学——「活映」のメディア史一九一一—一九五八』（和書房、二〇一三年。以下『ポスト活字』）で、帝国日本において活字メディアに代わる映像メディアを使った社会教育（活字

ならぬ「活映」）を夢見た人々の群像を描いた。

いつの時代もニューメディアへの期待は絶えることがない。本章は一見すると戦前の活映事業とは何の関わりもない戦後の『放送朝日』というマイナーな雑誌の記録だが、「ニューメディアへの期待」と「未来志向」（そして、それらの挫折）の歴史を描いたという意味で、『ポスト活字』の続編として読むこともできる。一〇年ほどで休刊になってしまったマイナーな雑誌からでも、我々は過去の人々が「期待」した「未来」の一端に触れることができるのである。

七 結論

本稿では、メディア史研究者の手による各章を紹介してきた。いずれの「論壇雑誌」も竹内が最初に示した「政治・経済から文藝・哲学・科学まで部門を限定せず掲載し、一つの体系をあたえる高級評論誌、いわゆる『綜合雑誌』のこと」という条件にあてはまる。

だが、「政治・経済から文藝・哲学・科学まで部門を限定せず掲載し、一つの体系をあたえ」た雑誌が即「論壇雑誌」になることができるのだろうか。

第九章執筆者の大澤聡は、べつの場所で「論壇時評」があつてはじめて「論壇」が成立することを指摘している。⁽¹⁰⁾「論壇」はそれ自体が所与のものとして存在するのではない。「論壇時評」にどのような雑誌記事が取り上げられ、論じられるかによつて、その外枠が仮に定められ、また相互の批評のやりとりによつて絶えず更新されてゆく言論をめぐる歴史的現象のことを「論壇」と呼ぶのではなかったか。そしてその「論壇」の内実を補填するのが、あとから仮に「論壇雑誌」とされることになる雑誌やそこに集う人々である。だとするならば、そもそも歴史的に何が「論壇」「論壇雑誌」とされてきたのか、ということが問われなくてはならなかったはずである。まず「論壇」自体の変遷をたどった研究が本書全体の「フオーマット」として存在し、そのなかに各執筆者が扱った「論壇雑誌」がどのよう

に位置づけられるのか、という全体的なマッピングの作業が行なわれるべきであつた。それなくしては、現在の「論壇」における輿論形成も、「論壇」の語義の拡張や組み替えも、「論壇」の未来についての思考もありえない。「メディア論はメディア史である」のだから。⁽¹¹⁾

もちろん本書に掲載された論文は、いずれも非常に読み応えがある。だが、紹介されていた各雑誌が、絶えず移ろいゆく歴史的現象としての「論壇」のなかでどのようにして相互に切り結んでいたのか（いなかっただのか）、ということが見えにくいところに、本書の憾みがある。「雑誌研究」ならば、それでも構わないだろう。だが、本書は「論壇雑誌研究」なのである。

これは、何も評者独自の意見ではない。本書巻末の「関連年表」を作成した白戸健一郎も、べつの場所で「論壇誌の年表を作成している作業のなかで、過去にどのような論争があつたのか、それがどう展開されて、いまに至っているのかを把握しておくことは非常に重要だと感じました」と語る。⁽¹²⁾その白戸の手による年表

は、『國民之友』創刊（一八八七年）から『思想地図』
（二〇一三年）まで、およそ二三〇年間の「論壇雜誌
の創刊・廃刊・改称」および「主要論争と主要論文」
を掲載した労作である。

とはいえ、基本的に本書は歴史的現象というよりは
理念型としての「論壇」を前提とし、そこから当為と
しての「論壇」を導きだそうとする営為であった。佐
藤卓己も「あとがき」で述べているように、執筆者た
ちの間では「論壇」が「荒野野」となってしまった現
在にあって、「それにもかかわらず」、「論壇の必要性」
を、「論壇再構築の可能性」を、問うていかんとする問
題意識が共有されていたようである（三二―三三―三六
頁）。アカデミズムと大衆ジャーナリズムとを架橋する
ものとして「論壇」を想定し、それがどうあるべきか
（当為）を探る手がかりを実際にある（あった）「論壇
雑誌」という「歴史」のなかに求めたのが本書だ。
では次になされるべきことは何か。しつこいようだが、
歴史的「存在」としての「論壇」「論壇雑誌」研究

ではないだろうか。もちろん歴史的アプローチにも弱
点はある。当たり前だが、これでは過去に「論壇」「論
壇雑誌」とされてきたものしか扱うことができない。
おそらく『暮しの手帖』や『放送朝日』を取り上げる
ことは不可能だろう。だから歴史的アプローチの提案
は、理念型としての「論壇」を前提とした本書の「論
壇雑誌」研究の意義を否定するものではない。

ともかく、本書は先行研究が乏しい「論壇」「論壇雜
誌」に対して本格的に挑んだ野心的な内容となっている。
すなわち、本書は今後展開されるべき「論壇」「論
壇雑誌」研究の叩き台を提供したと同時に、本書を乗
り越えてさらに「論壇」「論壇雑誌」研究を更新してゆ
く可能性も内包している。したがって、『日本の論壇雜
誌』は「論壇」「論壇雑誌」研究の「フオーマット」で
あり、「アキレス腱」である。そして「論壇」「論壇雜
誌」研究とは、メディア史研究の「フロンティア」な
のだ。

- (1) たとえば、佐藤卓己『キング』の時代——国民大衆雑誌の公共性』(岩波書店、二〇〇二年)、大澤真幸・斎藤美奈子・橋本努・原武史『一九七〇年代転換期における『展望』を読む——思想が現実だった頃』(筑摩書房、二〇一〇年)、吉田則昭・岡田章子編著『雑誌メディアアの文化史——変貌する戦後パラダイム』(森話社、二〇一二年)など。
- (2) もちろん存在しないわけではない。たとえば奥武則『論壇の戦後史一九四五—一九七〇』(平凡社、二〇〇七年)がある。だが、本書は『世界』や『朝日ジャーナル』といった左派系の雑誌に関する記述に頁の多くが割かれている。
- (3) 吉野については、佐藤卓己『管制高地に立つ編纂者・吉野源三郎——平和運動における軍事的リーダーシップ』(谷部良二編『近代日本のリーダーシップ』千倉書房、二〇一四年)が詳しい。佐藤は吉野がかつて優秀な予備役砲兵少尉であった事実に着目し、軍事的リーダーシップによつて平和運動が支えられていた逆説を指摘している。
- (4) 佐藤卓己『言論統制——情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』(中央公論新社、二〇〇四年)。
- (5) 佐藤卓己『八月十五日の神話——終戦記念日のメディア学』(筑摩書房、二〇〇五年)。
- (6) 佐藤卓己『ヒューマニティーズ歴史学』(岩波書店、二〇〇九年、八九—九一頁)。
- (7) 村上義雄『朝日ジャーナル 現代を撃つ』(朝日新聞出版、二〇〇九年、四六—四七頁)。
- (8) 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子・大澤聡『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』(創元社)刊行を機に『週刊読書人』二〇一四年七月二一日。
- (9) 色川大吉『歴史の方法』(大和書房、一九八五年、一〇八頁)。
- (10) 大澤聡『論壇時評』の誕生——一九三〇年代日本のジャーナリズム空間』(出版研究)三九号、二〇〇八年。ちなみに『論壇時評』研究の先

駆けとしては辻村明『朝日新聞の仮面——『論壇時評』の偏向と欺瞞をつく』(『諸君!』一九八一年一月号)がある。

(11) 佐藤卓己『現代メディア史』(岩波書店、一九九八年、二二頁)。

(12) 佐藤卓己『災後のメディア空間——論壇と時評二〇二二—二〇二三』(中央公論新社、二〇一四年、二六六頁)。